

# 高岡漆器 むきみかん火鉢

MOVIN' college

高岡の伝統工芸を鑑賞する学科

1

## 大正期のデザイン工芸の傑作

昭和期までの高岡では、銅器、漆器、捺染という3種類の主要な工芸産業が栄えていた。そのうち「高岡捺染」は、現在では姿を消してしまっただが、ともに経済産業省から「伝統的工芸品」の指定を受けている「高岡銅器」と「高岡漆器」は、今なお、高岡のみならず北陸を代表する産地工芸として、全国に名を馳せている。

両者のうち銅器は、どちらかといえば今日では美術工芸品というよりも、銅像や梵鐘、仏具の生産というイメージが色濃い。対して、漆器は、箱や盆、棚など一般的な工芸品のみを作り続けてきたと、漠然と考えられがちのようだ。

だが、実際には、高岡漆器も近代期以降は、伝統的な形状の品々ばかりではなく、各時代ごとに斬新な製品を開発し、注目を浴びてきた。その典例例として挙げられるのが、大正期にヒットを飛ばした《むきみかん火鉢》であろう。

既に高岡では、明治末には挽物木地で火鉢を作る試みがなされていた。そのうえで、数ある高岡漆器の塗りの技法のうち最も基本的な朱塗り



むきみかん火鉢  
大正期頃(高さ30.0 径52.5cm)  
天野漆器株式会社 所蔵

の滑らかな質感を活かし、かつ形状に趣向を凝らして生み出されたのが、この火鉢である。シンプルだが、モダンで華やいだ外観は、大正期のデザイン工芸品の傑作と評するにふさわしい。伝統を尊重しつつも常に進取の気風を失わない、高岡人の心意気に満ちた逸品といえる。

### デザインのポイント

#### ●point1

柔らかな曲線を活かしつつも、全体には無用な装飾を排した、端正なシェイプデザイン。

#### ●point2

ここでは、アール・ヌーヴォーからアール・デコに移行する段階に現れた、過渡期的な性格の、欧米新デザインの影響がうかがわれる。

#### ●point3

一方で、自然の事物から発想しながらも、形態を単純化、抽象化するという、日本の伝統的な美意識も、本品の形状から見て取れる。



### 大熊 敏之

富山大学大学院  
芸術文化科学研究科 准教授

[専門分野]  
日欧近世近代美術交流史、  
工芸・デザイン史、  
日本伝統造型史論

能作

NOUSAKU

〒939-1118 富山県高岡市戸出柴町46-1

TEL 0766-63-5080 www.nousaku.co.jp